

国文学研究資料館が藤村記念館（馬籠）所蔵
島崎藤村「夜明け前」直筆原稿の画像デジタル公開
近代文学史上の重要歴史長篇

国文学研究資料館（以下「国文研」）は、「一般財団法人藤村記念郷・藤村記念館所蔵」（以下「藤村記念館」）の島崎藤村「夜明け前」自筆原稿37点（計3055枚）を撮影、デジタル画像化し、2025年7月22日に国文研の「国書データベース」にて公開しました（「夜明け前」自筆原稿〔近代〕 画像一覧 <https://kokusho.nijl.ac.jp/page/list-TSMM.html>）。近代文学史を代表する歴史長篇である「夜明け前」の自筆原稿は、小説が形づくられていく過程を克明に浮かびあがらせ、藤村の思考の痕跡を今に伝える第一級の資料です。

島崎藤村（1872～1943）は、筑摩県馬籠村（現・岐阜県中津川市馬籠）に生まれました。早くに東京へ出ると、北村透谷らとの出会いによって創作の道に入ってゆき、『若菜集』など一連の新体詩によってまずその名を知られるようになります。その後、小諸での教員生活を経て創作の中心は散文へと移り、1906年に発表した「破戒」が評判となると、続く「春」や「家」といった自らや家族を描いた作品によって自然主義を代表する小説家としての地位を確立しました。第一次世界大戦中のフランスに滞在して以降は自国の文化や歴史に対する関心を深めてゆき、そうした関心の成果として書かれた「夜明け前」は、幕末・明治維新期に郷里・馬籠の代表役を務めた父・島崎正樹の生涯に取材した藤村畢生の大作として知られています。「草叢」の視点から激しく移り変わりゆく近代日本の社会を描いた一作として今日まで多くの人々に読み継がれてきました。

■ デジタル公開の意義

今回公開される「夜明け前」原稿は、もともと藤村自身が生前に創作活動の後援者であった実業家・大倉喜七郎への感謝のしるしとして原稿用紙を章ごとに37冊の和装本の形に自ら仕立てて贈ったもので、藤村没後に大倉より改めて藤村記念館に寄贈されました。2024年に藤村記念館と国文研との協力・連携のもと、研究および教育に役立てるために撮影を行い、「国書データベース」にて公開されるはこびとなりました。

「夜明け前」は、1929年から35年にかけて雑誌『中央公論』に連載された長篇小説です。原稿ではその執筆過程において藤村が細かな表現を繰り返し修正したり、文章の位置を再検討したりといったおびただしい苦心のあとがうかがえます。藤村記念館では申請があれば閲覧に応じてきたものの、その分量は膨大であり、通覧には困難が伴いました。今回の画像公開によって、インターネットが利用できる環境であればどこからでもいつでも

自由に閲覧できるようになったことで、今後の研究・教育に大きく貢献することが期待されます。

なお今回の画像公開は、国文研の本年度事業「近代文献草稿・原稿類に関する所在目録調査と研究」の一環であり、すでに公開している「島尾敏雄特別資料」・「梅崎春生特別資料」（かごしま近代文学館蔵）・「森田思軒自筆原稿資料」（笠岡市教育委員会管理）・「中原中也自筆資料」（中原中也記念館蔵）・「武者小路実篤自筆資料」（武者小路実篤記念館）・「上野英信自筆資料」（福岡市総合図書館）「山村暮鳥自筆資料」（暮鳥会所蔵、茨城県立図書館寄託資料）とともに見ることで、近代文学における「自筆資料」の具体的な姿を知ることができます。

〈本件に関するお問い合わせ〉

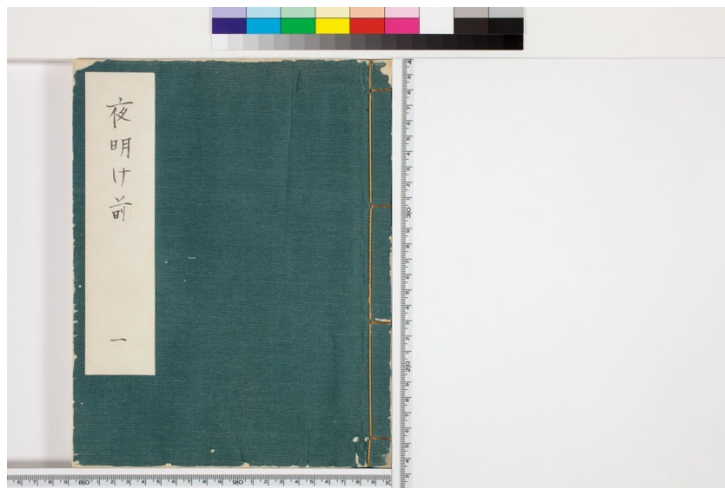
・国文学研究資料館 管理部学術情報課 社会連携係

E-mail: jigyoku@nijl.ac.jp/TEL: 050-5533-2910 / FAX: 042-526-8604

・藤村記念館

TEL:0573-69-2047 FAX: 0573-69-2231

■「国書データベース」で公開される「夜明け前」直筆原稿の例



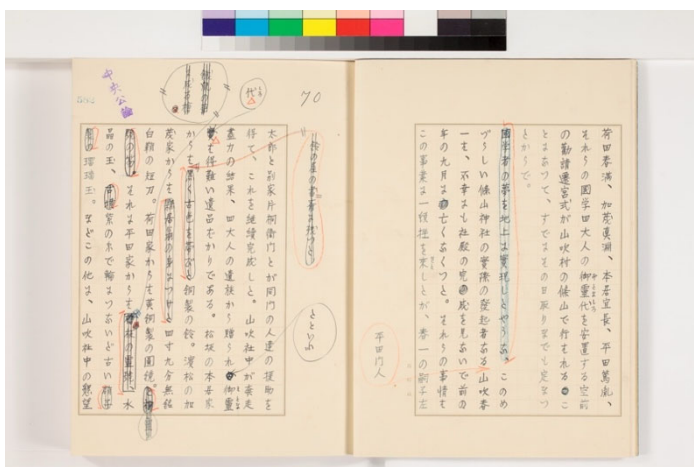
一冊ずつ四つ目綴じの和本の形に仕立てられた原稿。



「序の章」の前には大倉喜七郎へと寄贈した経緯が語られている（聴松は音楽家としての大倉の名前）。



よく知られる「序の章」の書き出し部分。



第一部第十二章の途中。国学に関する記述に心を砕いている様子がうかがえる。